

宮崎アニメにおける「戦う少女」の表象

浅賀小百合

序

私は小さい頃から、アニメ好きの兄の影響で一緒になってアニメ番組を夢中で見ていた。例えば、『ポケットモンスター』や『名探偵コナン』など、今思うと男の子に人気のありそうなアニメばかりを見ていた。しかし、なかでも特に私が夢中になっていたアニメが、『美少女戦士セーラームーン』シリーズである。『ポケモン』や『コナン』も面白かったのだが、男の子向き番組ばかりを見ていた私にとって『セーラームーン』は女の子にピッタリのアニメで、ヒロインは女の子であれば誰でも憧れるような新しいタイプのキャラクターであった。長い髪の毛に大きなりボンをつけ、戦闘服の代わりに可愛らしいセーラー服を着て敵キャラと戦うセーラームーンに、今まで見てきたアニメにはなかったインパクトが感じられた。そのため私は『セーラームーン』にはまり込み、イラストがプリントされたTシャツやトレーナーを着たり、『ムーンスティック』と呼ばれるバトン状の武器の玩具を購入したりと、多くのグッズを集めるほどの『セーラームーン』マニアになった。

そうした子ども時代の体験を経たわけだが、私は大学に入ったとき「ジェンダー論」という授業をとり、そこでジェンダーとは何かについて学ぶ機会があった。最初は軽い気持ちでこの講義をとってみたのだが、何回か授業を受けていくうちにジェンダーのことに興味を持ちはじめ、卒論を書くならそれをテーマにして書いてみたいと思った。また、大学のゼミで表象分析というものを学び、今まで単に楽しんで見ていたアニメにも、そのイメージに意外な意味が込められていることに気づくようになった。表象については本論で詳しく述べるが、簡単に言うとそれは、アニメやドラマなどのメディアから社会・文化的な意味を読み取ることができる分析ツールとなりうるのである。

先に私は『セーラームーン』に衝撃を受けたと書いたが、その大きな理由

としてヒロインが戦うということがあった。では、こうした男の子向け番組に登場するヒーロー顔負けのヒロインは、一体いつ頃から登場したのだろうか。諸説はあるが、1982年に宮崎駿が監督したアニメの『風の谷のナウシカ』が大きな転換点となったと言われている。そしてそれ以降、従来のディズニーの伝統に従ったお姫さま系の少女アニメから、『セーラームーン』の月野うさぎ、『新世紀エヴァンゲリオン』の惣流・アスカ・ラングレーや綾波レイ、そして『魔法少女まどか☆マギカ』の鹿目まどかや暁美ほむらなど、戦う少女たちが登場するアニメがごく普通に見られるようになったのだ。

そこでこの論文では、『ナウシカ』や『セーラームーン』などのアニメにおける「戦う少女」の表象を、ジェンダーの観点から論じていく。第一章では、表象分析とは何かを概説し、『魔法使いサリー』や『ひみつのアッコちゃん』、『魔法のマコちゃん』など、1960~70年代にかけて制作された『ナウシカ』以前の少女アニメを取り上げ、それらを『ナウシカ』と比較していく。ここではそれぞれの時代の社会的背景を概略しながら、文化的な要素がアニメにおける少女の表象にどのような影響を与えてきたのかに注目し、その表象の変化を分析していく。

第二章では、『ナウシカ』以外の宮崎アニメ、とくに『もののけ姫』と『千と千尋の神隠し』に焦点を当て、それとともに『セーラームーン』や『まどか☆マギカ』、『エヴァンゲリオン』など、『ナウシカ』以降に放送されていたアニメを中心に「戦う少女」の表象分析をする。『魔女の宅急便』に代表されるように、宮崎アニメでは少女が「飛ぶ」シーンがたびたび見られるが、この「飛ぶ」という行為が何を表象しているのかに着目していく。ここでもその時代の社会的背景を概略しながら、文化的要素が少女のイメージにどのように反映されているか、ジェンダーの観点から論じていくつもりである。

以上がこの論文の要旨である。ジェンダーの問題を日本で意識化させた1970年代の女性解放運動や、1980年代の男女雇用機会均等法の成立を経て、現在の女性の社会的な地位は確実に向上している。しかし、セクシャル・ハラスメントやマタニティ・ハラスメント問題など、メディアを見てもいまだにジェンダーをめぐる問題は完全になくなったわけではない。この卒論を通じて、ジェンダーについてさらに深く考え、これからひとりの女性として、また卒業後はひとりの社会人として、それを自分の身近な問題として捉えて

いきたいと思っている。

第一章

1960年～1980年代のアニメにおける「少女」の表象

この章では、1960～80年代のアニメにおける「少女」の表象分析をする。具体的に『魔法使いサリー』、『ひみつのアッコちゃん』、『魔法のマコちゃん』と、宮崎駿のアニメの『風の谷のナウシカ』をとりあげ、それぞれそこで「少女」がどのようにイメージされているのかを分析し、またどのように変化していったか論じていく。

はじめに表象を定義すると、それはあるものを別のもので表すことで、簡単に言うとイメージのことである。たとえば、私たちがオタクを想像するとき、ズボンにチェックシャツを入れ、ショルダーバックを肩からぶら下げて銀縁メガネをかけている、『電車男』に出てくるような人物を想像する人が多いと思う。しかし、オタクとは実際はそういう人ばかりでなく、オシャレな洋服を着ている人や、清楚な女の子がオタクだったりもする。つまり、それはオタクそのものではなく、一般の人々が抱く「オタク」のイメージなのだ。このように表象を通して、ある対象への社会・文化的な眼差しを分析することができる。この表象理論を使って、以下1960～80年代の「少女」のイメージについて分析していく。

『魔法使いサリー』は1966年12月から1968年12月まで放送された東映魔女っ子シリーズ第一弾で、日本初の少女向けのアニメ番組として、アメリカのテレビシリーズ『奥様は魔女』のヒットをきっかけにして作られた番組である。その主題歌

で「魔法の国からやってきた / ちょっとチャームな女の子」とあるように、ヒロインの夢野サリーは魔法の国から来た王女である。彼女が人間界にやっ

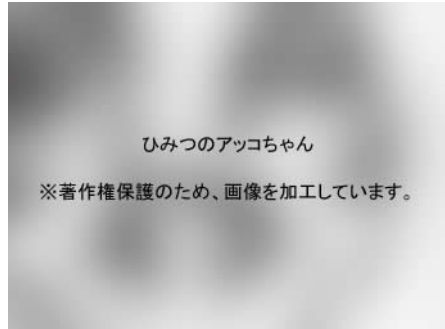
魔法使いサリー

※著作権保護のため、画像を加工しています。

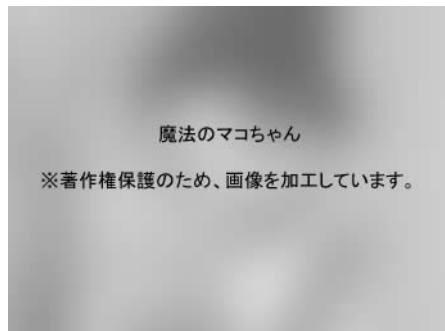
てきたのは、父親が魔法の国の王様で国政に忙しく、母は無理やり彼女に勉強させたりするなど、家庭が嫌になったからである。サリーは弟のカブと人間界に紛れ込み、色々な出来事に巻き込まれるが、それを魔法を使って解決する。

『ひみつのアッコちゃん』

は、1969年1月から1970年10月まで放送されていた東映魔女っ子シリーズ第二弾である。『アッコちゃん』のヒロインの加賀美あつ子は、サリーのようなお姫様ではなく、ごく普通の人間の女の子である。しかしオープニングに見られるように、「テクマクマヤコンテクマクマヤコン」という呪文によってお姫様に変身する姿が印象的である。サリーと同じように、彼女も魔法を使って問題を解決する。



『魔法のマコちゃん』は、1970年11月から1971年9月まで放送されていた東映魔女っ子シリーズ第三弾である。浦島マコは深海の国の姫であるが、嵐で難破した船を「人魚のなみだ」といわれるペンダントを使って救助する。そして、そこに乗っていた一人の船員に恋をして、マコは人魚の国に戻らずに人間界に留まることにする。不慣れた人間界で苦労しながら様々な出来事を経験するうちに、彼女はやがて人魚に戻れないことを覚悟し、人間になることに決める。マコもこの物語で、魔法のペンダントを使ってトラブルを解決していく。



この三つのアニメ『サリー』、『アッコちゃん』、そして『マコちゃん』に

共通することは、魔法を使って難題を解決するということである。この設定はディズニー・アニメの『シンデレラ』に基づいている。このことに関連して、『紅一点論』において斎藤美奈子は次のように述べている。

女の子用の物語といえば、やはり「お姫様もの」、姫君婚姻譚である。逆境にあったお姫様が王子様にめぐりあい、試練をこえて結婚にこぎつけるラブ・ロマンスだ。グリム童話の白雪姫、ねむり姫、シンデレラなどが典型である。アンデルセンの人魚姫のようなメロドラマもなくはないが、基本的には王子様との結婚で「あがり」の夢のようなお話だ。(斎藤 14頁)

斎藤にしたがって言えば、伝統的な女の子の物語では、「お姫様」が「王子様」と出会い、結婚が最終的な「あがり」となる。サリーとマコが「お姫様」、アッコちゃんがそれに憧れるというのは、まさしくこのパターンに基づいている。

そして、魔法を使って難題を解決することもまた、「お姫様もの」の典型的なパターンである。男の子向けのテレビ番組『ウルトラマン』や『仮面ライダー』のように、敵キャラが出てきたら変身して相手を力で倒すのではなく、少女がヒロインのアニメでは、変身はするものの、力に頼ることなく魔法を使って敵キャラを怯ませる。このことについて、斎藤は次のように述べている。

男の子の国では、変身とは、ずばり武装の別名だった。女の子の国はちがう。変身とは、武装ではなく化粧、パワーアップではなくメイクアップのこと。別言すれば、女の子の変身とは、シンデレラの変身と同じく着替えである。(斎藤 31頁)

斎藤によれば、女の子の変身は戦うための変身ではなく、「メイクアップ」であるという。つまり、ウルトラマンや仮面ライダーのように、戦うためではなく「化粧」としての変身であり、同じ変身でもジェンダー区分が見られるのだ。

しかし、1960~70年代のアニメにおけるディズニーの伝統にしたがった「少

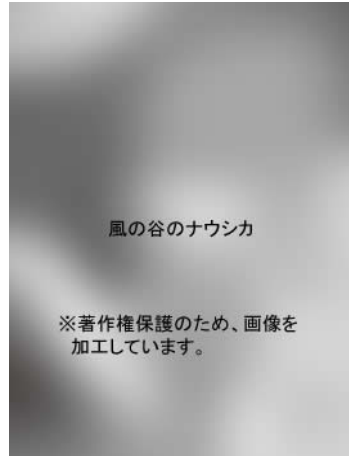
女」のイメージは、1980年代になると変化を見せるようになる。その転機となった作品が、宮崎駿の1984年のアニメ『風の谷のナウシカ』である。

まずあらすじを述べると、高度な文明社会を破壊した最終戦争「火の7日間」から1000年が経ち、腐海と呼ばれる汚染地帯が地表を覆って、そこには王蟲をはじめとすると巨大昆虫が生息している。この腐海からは瘴気が立ち昇り、ディストピア的な世界となっている。そのような終末

論的な世界において、ナウシカはわずか16歳にして風の谷の姫となり、腐海の毒に侵された王である父の代わりに、彼女が国を治めることになる。彼女は風の谷と同盟を組んでいるトルメキア軍とともに、敵軍のドルクと戦う。しかし、王蟲の暴走を身を挺して食い止めようとし、彼女は死んでしまう。だが、彼女の思いが王蟲に伝わり、その力によって再び生き返るところで物語は終わる。

以上があらすじであるが、ナウシカはサリーやマコと同じく「お姫様」として登場するが、そのキャラクターは正反対である。ナウシカはその可愛い姿にも拘らず、強い女性として、つまり「戦う少女」として表象されるのだ。彼女はガンシップと一緒に乗って、「用意！撃！瘴気マスクをつけろ！」や「シリウスに向かって飛べ！」など男勝りの命令を発する。また、彼女は王女であると同時に国の統治者でもあり、リーダーシップを発揮し、戦闘中でも恐怖心を持つことなく堂々と相手と戦っていく。先に述べたように、サリーやアッコ、マコなどのヒロインたちはディズニー・アニメの影響を受けて、力ではなく魔法でトラブルを解決したが、他方ナウシカはルパン三世あるいはガンダムのように武器を使って敵と戦うのである。では、なぜこのようにアニメにおける「少女」の表象が変化したのであろうか。それは時代の変化と連動している。

『サリー』や『アッコちゃん』、『マコちゃん』が放送されていた60~70年代、



当時の日本は高度成長期の時代を迎えていて、男性は社会に出て仕事をして働き、女性は結婚をして家庭で家事や育児をすることが「当たり前」とされてきた。実際、この時代の中学校の『学習指導要領』では、男子は技術の授業が、女子は家庭科の授業が必修とされていた。つまり、学校という義務教育の場でも、伝統的なジェンダー役割がしっかり教育されていたのだ。したがって、それに連動するかのように、アニメでも男の子は社会に貢献できる力強いヒロインで、女の子は、「お姫様」あるいは「家庭の天使」のような「やさしさ」や「おしとやかさ」を強調されるヒロインが多く登場したのである。

しかし、『ナウシカ』が公開された1980年代になると、社会進出する女性の数が増えていった。そのきっかけとなったのは、1970年代の女性の自由と自立を目指した女性解放運動である。つまり、1960年代後半にアメリカで起こった第二次フェミニズムの影響が1970年代に日本にも及んで、女性の社会参加を促進したのである。(HP「Weblio 辞書」)そして、1980年代には男女雇用機会均等法が成立し、働く女性やキャリアウーマンなどが急速に増えていった。このように、70~80年代にかけての日本における女性解放運動や男女雇用機会均等法などにより社会進出する女性が増え、女性は結婚して家庭に入るべきという旧来のジェンダー観が変化していったのである。『ナウシカ』における「少女」の表象の変化は、こうした女性の社会的地位の変化を映し出しているのである。

次章では、『ナウシカ』以外の宮崎アニメ、とくに『もののけ姫』と『千と千尋の神隠し』に焦点を当て、それとともに『美少女戦士セーラームーン』や『魔法少女まどか☆マギカ』、『新世紀エヴァンゲリオン』など、『ナウシカ』以降に放送されていたアニメを中心に「戦う少女」の表象分析をする。『魔女の宅急便』に代表されるように、宮崎アニメでは少女が「飛ぶ」シーンがたびたび見られるが、この「飛ぶ」という行為が何を表象しているのかに着目していく。ここでも時代の社会的背景を概略しながら、女性の社会的な地位の変化がアニメにおける「少女」のイメージの変化にどのように反映されているか、ジェンダーの観点から論じていく。

第二章

『風の谷のナウシカ』以降のアニメにおける「戦う少女」の表象

この章では、1984年以降の宮崎駿のアニメ、とくに『もののけ姫』と『千と千尋の神隠し』に焦点をあて、それとともに『美少女戦士セーラームーン』や『新世紀エヴァンゲリオン』、『魔法少女まどか☆マギカ』など、同じく『ナウシカ』以降に制作されたアニメを中心に、「戦う少女」の表象分析をする。また、『魔女の宅急便』に代表されるように、宮崎アニメでは少女が「飛ぶ」シーンがたびたび見られるが、この「飛ぶ」という行為が何を表象しているのかにも着目していく。ここでも時代の社会的背景を概略しながら、女性の社会的な地位の変化がアニメにおける「少女」のイメージの変化にどのように反映されているか、ジェンダーの観点から論じていく。

最初に1997年の宮崎アニメ『もののけ姫』を取り上げる。あらすじを述べると、エミシという村にタタリ神が襲ってきて、そこに住んでいた少年アシタカはタタリ神を倒したが、そのとき右腕に死の呪いをかけられてしまう。その後、彼はその呪いの謎を解く旅に出て、その途中でエボシという女性統領が率いるタタラ場という土地にたどり着く。そこはシシ神の森を削って、鉄を作る巨大な製造工場であった。しばらくしてアシタカは、犬神（山犬）に育てられた少女サンとも出会うことになる。彼女は自然を破壊するエボシのような人間を憎み、タタラ場やエボシに何度も襲撃を繰り返す。他方、エボシたちはシシ神の首を追い求めている。なぜならその首は手に入れると不老不死になると言い伝えられているからだ。しかし、首を討ち取られたシシ神はデイダラボッチとなって、タタラ場と森を壊滅状態に陥れる。アシタカはシシ神の首を取り戻すことによって暴走を止め、デイダラボッチは消滅

もののけ姫

※著作権保護のため、画像を加工しています。

し、森に再び平和が訪れる。最後にアシタカは、「サンは森で、わたしはタタラ場で暮らそう。共に生きよう」と言ってサンと別れる。

以上があらすじであるが、『もののけ姫』に出てくる中心的な女性はエボシとサンである。タタラ場は女性の統領に率いられ、そこで働いているのもほとんどが女性である。『紅一点論』において、斎藤美奈子はこのことについて次のように述べている。

おもしろいのは、タタラ場の独特な雰囲気である。男衆もいるにはいるが、ふがない。タタラ場（歴史的には女人禁制だった場所である）でタタラを踏むのも女、石火矢（鉄砲）で自衛するのも女。男の仕事とされてきた肉体労働や軍事を、ここでは女たちが担っている。『エヴァンゲリオン』と同じネガポジ反転、男女逆転の構造がうかがえる。（斎藤 210 頁）

斎藤が述べるように、タタラを踏んだり鉄砲を使ったりする仕事は、今までは「男性の仕事」とされていたが、このアニメでは女性がそれを担っている。このジェンダー役割の逆転は、90年代当時の女性の社会進出を反映していると言えよう。

サンもその可愛らしい姿とは裏腹に、男勝りの少女である。例えば、彼女はタタラ場を一人で襲撃したり、彼女を救おうとしたアシタカに対して「死など恐いもんか。人間を追い払うためなら命などいらぬ」と発言するなど、ナウシカのように肉体的にも精神的にも力強さを持った女性として表象されている。このように、従来は「男性の仕事」であったものに従事する女性や、男性ヒーローに劣らない力強い女性を描くことによって、このアニメには旧来のジェンダー役割を逆転させた「自立した女性」が表象されているのである。

次に、2001年の『千と千尋の神隠し』を取り上げる。あらすじを述べると、荻野千尋は両親と引越し先の町に向かう途中、奇妙なトンネルを抜けると誰もいない町にたどり着く。そこは朽ち果てたレジャーランドで、そこにはなぜか屋台が並んでいた。両親は屋台の料理をガツガツと食べ始めるが、それは神々の料理であったため、二人は呪われてブタになってしまう。一人

残された千尋は謎の少年ハクと出会い、両親を助けるために湯屋で「千」という名前で働きはじめる。そんなとき、湯屋の女主人である湯婆婆の命令で銭婆から魔法の印鑑を盗んだハクが、大怪我を負わされてしまう。千尋は銭婆に謝りに行き、

ハクは命を取り留めることができる。実はハクは川の守り神の少年であり、千尋が幼い頃に落ちた川の化身であることに気づく。そして、彼女は湯婆婆に両親を元の姿に戻してもらうように頼み、無事に人間の世界へ戻っていく。

千尋は両親を救うために湯屋で働くことになるが、はじめは慣れない仕事も徐々にこなせるようになり、湯婆婆やリンに認められて、少女から大人の女性に成長する。つまり、千尋は「戦う少女」ではなく、「働く少女」として表象されているのだ。また、千尋がハクの背中に乗って「飛ぶ」シーンがあるが、それは『魔女の宅急便』でキキがホウキに乗って空を飛ぶ姿や、『天空の城ラピュタ』でシータがバズーと一緒に凧に乗って空を飛ぶシーンを思わせる。このように宮崎アニメでは少女が「飛ぶ」場面が多く見られるが、これはジェンダーの束縛から離脱することを意味していると言えよう。つまり、「飛ぶ」少女たちには、社会のジェンダー規範から離れる「自立した少女」が表象されているのである。

このような宮崎アニメにおけるパワフルな少女のイメージは、その後のアニメに大きな影響を与えることになる。前章でも論じたが、『ナウシカ』以前に放送されていたアニメでは、少女のイメージは伝統的なディズニーアニメに基づいて造形されていた。しかし、『ナウシカ』以降では、自分の力で難題を解決するヒロインたちが次々と

魔女の宅急便

※著作権保護のため、画像を加工しています。

千と千尋の神隠し

※著作権保護のため、画像を加工しています。

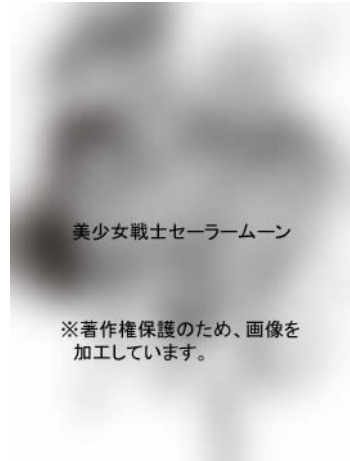
登場してくるのである。その代表例が、1992年から1997年までテレビ朝日系列で放送されていた『美少女戦士セーラームーン』である。

このアニメには、月野うさぎや水野亜美など5人の少女が登場する。彼女たちはごく普通の中学生で、「幻の銀水晶」を狙うダークキングダムという悪の組織が現れたときに、セーラー戦士に変身をする。この女の子の変身について、斎藤は次のように述べている。

女の子の国では、変身後の方がプロテクト効果が低く、戦闘には不向きな服装である場合さえ少なくない。足むきだしのミニスカート、胸のガバッと開いたレオタード、先のとがったハイヒール、ひらひらと邪魔なリボンやスカーフ、きらきら光るアクセサリー（が武器の役目を果たすことが多いにしてもだ）。女の子の国の変身は、そもそもが衣装だけではなく肉体の着替え、つまり「大人の女性」への変身を意味する（斎藤31頁）

斎藤が言うように、セーラームーンはセーラー服を着て、ハイヒールのブーツを履き、アクセサリーを身につける。つまり、ウルトラマンや仮面ライダーのように敵を倒すための変身ではなく、それは「大人の女性」になるための変身なのである。「大人の女性」になるための変身とは、「自立する女性」になることを意味する。つまり、セーラームーンも伝統的なディズニーアニメの「お姫様」とは違い、社会に出て活躍する「自立する女性」のイメージに従って表象されているのである。

次に、1995年から1996年にテレビ東京系列で放送されていた『新世紀エヴァンゲリオン』を取り上げる。あらすじを述べると西暦2015年、14歳の少年碇シンジは、父であり謎の組織NERVの長官である碇ゲンドウから、



人型汎用兵器エヴァンゲリオンに乗って使徒と呼ばれる「敵」と戦うように命じられる。シンジの他にも惣流・アスカ・ラングレーや綾波レイの少女たちが、エヴァのパイロットとして命をかけて使徒と戦っていく。セカンドインパクトや使徒

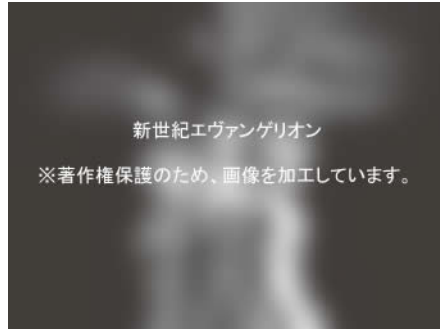
の正体、「人類補完計画」など多くの謎をちりばめながら、『エヴァンゲリオン』は少年少女たちの成長と挫折を描いていく。

ここではアスカとレイに焦点を当てて、このアニメにおける「少女」の表象分析をしていく。弐号機のパイロットのアスカは、シンジとは対照的で、一見して自信に満ちあふれた元気な女の子として描かれる。彼女はシンジやレイとは違って実力でパイロットとなり、シンジに対して常に上から目線の態度をとる。パイロットの地位を実力で勝ち取り、使徒と積極的に戦うアスカは「戦う少女」であり、キャリアウーマンのようでもある。

他方、レイは感情表現が乏しく、ゲンドウに命令をされたことだけを淡々とこなす。彼女は身体つきも細く、色白な病んだ感じの少女であるが、エヴァに乗ることを拒否したシンジに「じゃあ、寝てたら？初号機には私が乗る」と戦うことに少しも動じない。また彼女は、「あなたは死なないわ、私が守るもの」と、シンジを助けるために自爆する。レイは見た目はか弱そうに見えるものの、彼女もまた戦うことに物怖じしないナウシカのような力強い少女、つまり「戦う少女」なのである。

「「おんなの子ども」が主体になったこのチーム」と斎藤が述べているように、アスカとレイはヒーロー以上に「ヒーロー」らしいヒロインとして表象される（斎藤 184頁）。シンジの「弱さ」とアスカやレイの「強さ」は、男女雇用機会均等法の制定に象徴されるように、もはや日本が男性中心の社会ではなくなってきたことを表している。

最後に、2011年に毎日放送で放送された『魔法少女まどか☆マギカ』の「少女」のイメージを分析する。あらすじを述べると、鹿目まどか、暁美ほむら、

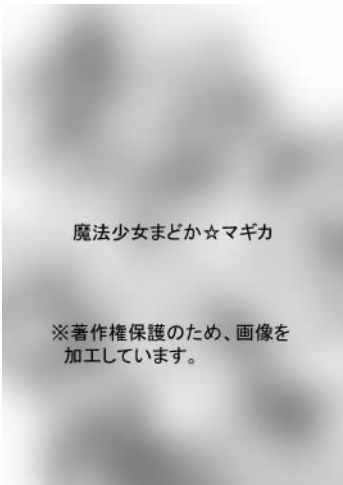


美樹さやか、巴マミ、佐倉杏子はごく普通の少女であるが、キュウベエという動物によって魂をソウルジェム化することで魔法少女になって、一つだけ願いを叶えることができる。しかし同時に、彼女たちは魔女を倒さなければ死んでしまうというリスクを背負うことにもなる。魔法少女になるかならないかは、少女たちの選択に委ねられる。さやか、マミ、杏子の三人は、魔法少女になるが魔女に敗れて戦死してしまう。まどかは戦死してしまった少女たちを取り

戻し、世界の仕組みを変えるために自分を犠牲にする。そして、ほむらは犠牲になったまどかの意思を継いで世界を守るために、他の魔法少女たちとともに戦っていく。

以上があらすじだが、話は複雑で簡単にはまとめられない。したがってここでも、『まど☆マギ』の「少女」の表象に注目していく。彼女たちは『セーラームーン』の戦士たちのように、初めから魔法の力があって悪の組織を倒すのではなく、魔法少女になるかならないかは自分自身の決定に委ねられる。また、一人の少女が戦死したとしても、またすぐに魔法少女に憧れる別の少女が出てくる。ここには、バブル崩壊以降の女性の社会的な位置の変化が表象されていると言えないだろうか。

バブル崩壊以降、パートや契約社員として働く女性の数が急増した。その結果、ほとんどの女性は社会において自己実現を目指したり、キャリアを重ねていったりすることができなくなり、取り換え可能な安い労働力となってしまった。実際に、経済協力開発機構による「2014年度」のデータによると、日本の非正規雇用の70%は女性であり、これを見ても女性の社会的な位置の不安定さがわかる（HP「厚生労働省」）。このように、『まど☆マギ』の魔法少女となっては消えていく少女たちの姿は、現代のパートや非正規雇用など取り換え可能な安い労働者としての女性イメージと重なり、そこには格下



魔法少女まどか☆マギカ

※著作権保護のため、画像を加工しています。

げされた女性の社会的な位置が反映されていると言えよう。

『魔法使いサリー』や『魔法のマコちゃん』などの1960年から70年代のアニメでは、少女は伝統的なジェンダー観に基づいて描かれていた。しかし、『ナウシカ』以降の少女アニメでは、女性の社会的地位の変化が「戦う少女」や「働く少女」の表象として反映されている。だが、『まど☆マギ』になると、そうした社会進出する女性といったポジティブなイメージから、非正規雇用者に代表される不安定な女性の社会的立場を表すネガティブなイメージに変化していった。

最後に、これまで分析したことを踏まえ、自分の高校時代の経験を思い返して、現代の女性の在り方について考えをまとめてみたいと思う。

まとめ

私は兄の影響を受けて、小さい頃からテレビアニメをよく見ていた。私が特に好きだったアニメは『美少女戦士セーラームーン』である。可愛いルックスにオシャレな洋服を着て悪の組織と戦っているセーラームーンたちの姿は、当時の幼い私にとって憧れの存在であった。

しかし、ゼミの授業がきっかけでアニメの歴史を調べてみると、セーラームーンのような「戦う少女」がヒロインのアニメは1980年以前にはほとんどなかったことを知った。そこでこの論文では、「戦う少女」について論じてみようと思ったのだ。ここでは、宮崎駿のアニメを中心に「戦う少女」の表象を分析してきたが、どのアニメにおいても社会的な背景がヒロインたちのイメージに反映されていることが分かった。

『魔法少女まどか☆マギカ』では、現代のパートや非正規雇用など取り換え可能な安い労働者が魔法少女たちに表象されていると論じたが、このようなことが起きてしまうのは、やはり日本における女性の雇用体制がしっかり整っていないからだと思う。1985年に男女雇用機会均等法が制定されたことで、以前より女性が社会に参加しやすくなったものの、管理職など重要な職種に女性が占める割合はほんの微々たるもので、そのほとんどが使い捨て同然の不安定な職種に就いているのが現状となっている。

実際、私は高校生のときにホテルの清掃のアルバイトをしていたことがあ

るが、そこで働いていた人たちは30から40歳代の女性が多くを占めていた。その多くの女性は結婚をしていて子どもがいるが、パートや派遣社員として働き、賃金も高校生だった私とほとんど変わらないと言っていた。さらに賃金が安いわりには仕事もハードで、数ヶ月で仕事を辞めていく人も多く、辞めるとその代わりの別の新しいパートが入ってくるという繰り返しであった。

卒業後、私は社会に出て働く予定だが、将来結婚をして子どもが出来たとき、仕事に差し支えが生じたり、あるいは辞めなくてはならないのかしらと思うことがある。今の日本の女性の社会的地位を見てみると、そうした不安を強く抱いてしまう。社会に出ていく女性の数は増えたものの、まだまだ女性をめぐる社会的な問題は未解決のまま多く残っている。こういった問題を解決することで、女性が安心して家庭を作ることができて、家庭と仕事が両立できるようになるのではないかと思う。

参考文献

- 斎藤美奈子。『紅一点論』。ちくま文庫、2001年。
- 細谷等。「はじめての表象分析——キミにもできるイメージの読み方」、『接続』9所収。ひつじ書房、2010年。
- ササキバラ・ゴウ。『<美少女>の現代史』。講談社現代新書、2004年。
- 鹿嶋敬著。『男女共同参画の時代』。岩波新書、2003年。
- 宮崎駿。『風の谷のナウシカ』(DVD)。ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント、2003年。
- 宮崎駿。『もののけ姫』(DVD)。ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント、2001年。
- 宮崎駿。『千と千尋の神隠し』(DVD)。ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント、2002年。
- 宮崎駿。『魔女の宅急便』(DVD)。ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント、2001年。
- 宮崎駿。『天空の城ラピュタ』(DVD)。ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント、2002年。
- 宮崎駿。『ハウルの動く城』(DVD)。ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント、2005年。
- 庵野秀明。『新世紀エヴァンゲリオン』(DVD)。キングレコード、2015年。
- 新房昭之。『劇場版 魔法少女まどか☆マギカ [新編] 叛逆の物語』(DVD)。アニプレックス、2014年。
- 『美少女戦士セーラームーン R』(DVD)。東映ビデオ、2004年。

『魔法使いサリー』(DVD)。宝島社、2004年。

『ひみつのアッコちゃん』(DVD)。宝島社、2011年。

『魔法のマコちゃん』(DVD)。東芝デジタルフロンティア、2003年。

HP「ウィキペディア：女性解放運動」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A5%B3%E6%80%A7%E8%A7%A3%E6%94%BE%E9%81%8B%E5%8B%95> (閲覧日2015年7月4日)

HP「厚生労働省」 <http://www.mhlw.go.jp/> (閲覧日2015年11月1日)

『魔法使いサリー』(図版) <http://komiya316.exblog.jp/21136344/> (閲覧日2015年9月10日)

『ひみつのアッコちゃん』(図版) <https://www.youtube.com/watch?v=KykhC2-WP7s> (閲覧日2015年9月10日)

『魔法のマコちゃん』(図版) <http://blog.livedoor.jp/televimanga/archives/50852293.html> (閲覧日11月14日)

『風の谷のナウシカ』(図版) <http://prcm.jp/album/ghibligaippai/pic/14355450> (閲覧日11月14日)

『もののけ姫』(図版) <http://matome.naver.jp/odai/2138313339007466101> (閲覧日11月16日)

『美少女戦士セーラームーン』(図版) <http://matome.naver.jp/odai/2142357065865696501> (閲覧日11月16日)

『新世紀エヴァンゲリオン』(図版) <http://blogs.yahoo.co.jp/valdishasalt/6975982.html> (閲覧日11月16日)

『魔法少女まどか☆マギカ』(図版) <http://news.mynavi.jp/news/2013/10/04/052/> (閲覧日11月16日)

『千と千尋の神隠し』(図版) http://girlschannel.net/show_image/241704/1/0/ (閲覧日11月16日)

『魔法の宅急便』(図版) <http://matome.naver.jp/odai/2140998405262844601> (閲覧日11月16日)